

— 追悼 — 宮崎進さん 故郷からありがとう

— シベリアの記憶を喜びの歌へ —



2012年12月
鎌倉のアトリエにて

4年におよぶシベリア抑留。開放の日、ラーゲリ(強制収容所)の扉に鍵をかけてきました…。この瞬間からシベリアはひとりの画家の人生を揺さぶり続けることになった。

5月16日、宮崎進(本名・すすむ)先生が亡くなった。享年96歳。

先生を知ったのは、高校の時に手にした美術雑誌「求美」。ヨーロッパから帰国直後の特集だった。時は流れ、私は徳山市文化会館(現・周南市)に就職した。そこでは郷土出身の美術家や文化人などを展覧会形式で紹介する仕事についていた。早々に里帰り展を提案。企画が通り直接交渉することになった。

1989年3月10日、西武アートフォーラムで開催中の「宮崎進展」。無機質な壁面に、光の時代の作品群がならび壮観な宮崎ワールドが広がっていた。緊張のなか意を決して先生に故郷の思いを伝えた。すると笑みがこぼれた。すべてを受け入れてくださったのだ。そして同年10月、待望の個展が文化会館で実現した。オープニングでは、徳山尋常小学校時代の恩師、田中金一先生の話から始まり、岸田劉生の最期を看取った洋画家・前田麦二に弟子入りしたこと、中央画壇でも活躍した水彩画家の河上大二に画家の何たるかを教えられたことなど今ある創作の原点は故郷にあると熱く語られた。それは改めて故郷の思い出と当地で育まれた人間関係を再認識された一日であったように思う。

そしてここに徳山市(現・周南市)との正式なお付合いがスタートした。その後は美術顧問としてご指導いただき、1995年、徳山市美術博物館(現・周南市)開館の際は、我がことのように喜ばれた。2009年からは、名誉館長もお願いした。

さて、15歳で故郷を離れた先生は、日本美術学校卒業後、1942年20歳で応召、入隊後はソ満国境守備隊に配属。終戦後は、シベリアに抑留され、1949年帰還。一時故郷に身を寄せるが、1951年上京、光風会、日展で力をつけられた。1967年には、画壇の芥川賞といわれる第10回安井曾太郎記念賞を受賞、一躍売れっ子作家に。しかしながら自らを見つめ直すためヨーロッパへ。帰国後は、時流を越えた骨太の仕事をごなし絶えず時代を先導された。

60年代の哀感漂う旅芸人たち、70年代の省略化される人物像と光の追求、80年代には抽象化がさらに進み、その後半から90年代にかけては、ドンゴロス(麻袋)が主素材に。そして2004年のサンパウロ・ビエンナーレでは先生の目指す高い精神性と独自の造形美が世界の注目を浴びた。晩年はパーキンソン病の進むなか個展や出版を通してその核心について繰り返し伝えられた。

この長い仕事のなかでやはり主体となっていたのはシベリアだった。実は帰還後、早くからシベリアを描き始められている。それは亡くなった戦友たちへの鎮魂か、悲惨な事実を残したかったのか。しかしそれらは長く伏せられていた。しかし94年の全国巡回展からは文字通りシベリアが表舞台に登場した。

それは、「自分が何であるのか」から始まり「人間とは」そして「生きる喜び」へと行き着いた切なくも実り多い心の旅でもあった。

(周南市美術博物館館長 有田順一)